「四季」　32　兎

学名　Lepus　bracyurus.
ウサギ目ウサギ科の動物
名前の由来については様々な説があり、はっきりしない。

郷土資料から見た「兎（うさぎ）」のあれこれ

兎は古事記や昔話にも登場し、古くから人との関わりが深い動物である。それらに登場するのはノウサギ類だが、現在愛玩動物として飼育されているのはアナウサギ類で、この二つは前肢の長さで見分けがつく。前肢が長く座ったときの姿勢が斜めなものがノウサギ類である。

兎は、獣でありながら鳥と同じように「羽」と数える。これは獣肉食を忌む時代に、兎を鳥の仲間として食用にしたことに説がある。

山間部の畑は兎による農作物の被害が多く、木の枝を折って立てたりするなど、苗木の芽を害から守るさまざまな野兎除けが行われた。柏崎では「兎がでて全部刈られてしまうような畑には小豆を植えた」（「柏崎市史資料集　民俗篇」）とある。また、冬の天候にも関わりがあり「兎が木の芽の皮を低い所でむくと雪が少なく、高いと大雪」（「柏崎市史資料集　民俗篇」）になる前兆とされていた。

雪山では野兎狩りが行われた。柏崎でよく行われたやり方は、多人数で缶などを叩き大きな音で兎を追いたて、山の上に追いつめたところを鉄砲で撃つというものである。これは食害を防ぎ、肉や皮を得るという生活に密着したものだったが、狩猟の掟もまた村々で守っていた。

参考資料

「新潟県大百科事典」	新潟日報事業社出版部編	1984	「日本大百科全書」	小学館発行	1994
「世界大博物図鑑」	荒俣宏著	1988	「日本民俗大辞典」	吉川弘文館発行	1999
「柏崎市史資料集　民俗篇」	柏崎市史編さん委員会編	1986	「高柳の自然」	高柳町教育委員会発行	1990
「日本動物図鑑」	北隆館編集部編	1981	「日本国語大辞典」	日本大辞典刊行会編	1973